

被産性の三相

一人間にとって〈生まれる〉とはどのようなことか—

京都大学大学院教育学研究科 仲井慧悟

はじめに

本稿の目的は、人間にとって〈生まれる〉とはどのような意味をもつことであるのかを哲学的に問う準備をすることである。

この問いにおいては、〈生まれる〉に少なくとも二つの限定が加えられている。一つは、それが人間にとっての〈生まれる〉であるということである。人間以外の動物、とりわけ、有袋類や卵生の動物など、人間とは著しく異なる生まれ方をする動物は考察の対象ではない。もう一つは、ある人にとっての〈その人自身が生まれること〉についての問いであるということである。いわば一人称の〈生まれる〉を扱うのであって、自分の子どもが生まれること（二人称の〈生まれる〉）やどこかの誰かが生まれること（三人称の〈生まれる〉）などは扱わない⁽¹⁾。

したがって、ここで問われるのは〈ある人間にとって自分が生まれることはどのような意味をもつのか〉という問いである。この問いを考えるために本稿で取り上げるのが、被産性^{ひさんせい}という概念である。この概念について議論することで、〈生まれる〉についてのさらなる哲学的考察への準備とする。

本稿は以下のように進む。まず、〈生まれる〉のもつ基本的性格を確認し、〈生まれる〉を表す言葉として「被産」を、〈生まれる〉にもとづく人間の性質を表す言葉として「被産性」を用いることを提案する（第1節）。次に、被産性概念の着想源でもあるハンナ・アーレントの出生性（natality）概念を、被産性の第三相〈第二の誕生〉に光を当てた概念として紹介する（第2節）。そして、アーレントの出生性概念への批判として提起されてきた議論をみることをとおして、被産性の第二相〈第一の誕生〉について述べる（第3節）。最後に、そうした先行研究でも十分に論じられてこなかった被産性の第一相〈誕生前の現れ〉について述べる（第4節）。

第1節 なぜ〈生まれる〉を被産と呼ぶのか

〈生まれる〉を考えるために、まず、吉野弘の詩「I was born」を手引きとしよう。次のような一節がある。

少年の思いは飛躍しやすい。その時 僕は〈生まれる〉ということが

まさしく〈受身〉である訳をふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。

——やっぱり I was born なんだね——

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

——I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね—— [吉野 1968: 29-30]

動詞「生まれる」は「誕生する」という意味の自動詞であるが、他動詞「生む」（産む）の未然形に助動詞「れる」がついた受身形とみることにもできる。このような受身形は、「雨に降られた」「子どもに泣かれる」「父に死なれた」などととともに被害の受け身、迷惑の受け身と呼ばれ、当該事象の客観的表現ではなく、影響を被った側の感情を表現するものであるとされる⁽²⁾。〈生まれる〉とはまず、受動的な事態なのである。

〈生まれる〉には他にどのような特徴があるだろうか。居永正宏 [2014; 2015; 2016] は〈生まれる〉ではなく〈産む〉についての哲学的考察をおこなっているが、その際、生殖・出生・誕生・出産などではなく、一貫して「産み」という言葉を用いている。そこには、「産み」のもつ三つの特性、すなわち①「身体と身体の生々しい関わりにおいて他者は「生まれる」という「身体性」、②「産まれたものは必ず何者かから産まれるのであり、産むものは必ず何者かを産む」という「二元性」、③「誕生の瞬間に集約されるものではなく時間的な幅を持っており」、また「人間的な関わりの中でなされるものである」という「営み」性が含意されているという [居永 2014: 101]。〈生まれる〉にもそれら三つの特性は同様にあてはまるだろう。しかし、さきに述べたとおり、④自分の意志なく「生まれさせられる」という受身性をここに付加する必要がある⁽³⁾。

これらを踏まえると、〈生まれる〉を表すためには「出生」や「誕生」という言葉では不十分であることがわかる。「産み」にならって「生まれ」「産まれ」という言葉を用いることもできるが、本稿では「被産^{ひさん}」という言葉をつくり術語化する⁽⁴⁾。そして、被産という事態が人間にとってもつ意味やそれによって人間がもつ特性のことを「被産性」という語で表す。英語では、後で論ずる *nativity* と区別して、*bornness* と表記するものとする。

本稿の主題は、この被産性の諸相の解明である。本稿ではそれを〈生まれる〉のあり方に即して分けてみていく。それは、①胎内にいるままに周囲の人間の意識中に現れたり、お腹を蹴るなどして外界の人たちと交流したりす

るといふ〈誕生前の現れ〉、②胎内から外へ出るといふ〈第一の誕生〉、③人間世界で言葉と行為によって新しいことを始めるといふ〈第二の誕生〉の三つの相である。以下、③から①へと、時系列からすれば逆向きに論を進める。

第2節 被産性の第三相〈第二の誕生〉：アーレントの *natality* 概念

これまで〈生まれる〉を考えるとときに注目の的となってきたのは、ハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906–1975) が提起した出生性 (*natality*) という概念である。

アーレントは『人間の条件』(1958; 以下、HC) において、①生命維持という人間の条件にもとづく「人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力」である「労働」(*labor*)、②自然とは異なる人工的な世界をつくる「世界性」といふ人間の条件にもとづく「仕事」(*work*)、③「多数性」といふ人間の条件にもとづいて「直接的に人と人との間でおこなわれる唯一の活動力」である「活動」(*action*) という三つの行為のあり方を示している [HC 7]⁽⁵⁾。そのなかでも、出生性はとりわけ「活動」と密接な関係をもつ [HC 9]。それは、「出生 (*birth*) に固有の新しい始まりが世界のなかで感じられるのは、新参加者が何か新しいことを始める能力、すなわち活動する能力をもっているからにほかならない」からである [HC 9]。アーレントにおいては、多数性という条件こそ政治的生活の条件であり [HC 7]、その条件にもとづく活動こそが政治的な行為のあり方であって、出生性は「すぐれた意味で政治的活動力」と考えられる [HC 9]。それゆえに、「可死性 (*mortality*) ではなく出生性が、形而上学的思考とは区別された政治的思考の中心カテゴリー」だとアーレントは述べるのである [HC 9]。

以上からもうかがえるように、「始まり」としての活動は「出生性という人間の条件の現実化 (*actualization*)」である [HC 178]。この「現実化」は「応答する」(*respond*) ことであるともいわれる [HC 177]。すなわち、われわれがこの世界に生まれることにより与えられる出生性という人間の条件に応答し、それを現実化させることが、政治的行為としての活動なのである。

活動がこのような応答的な性格をもつがゆえに、アーレントはそれを「第二の誕生」(*second birth*) とも呼んでいる。

言葉と行為によってわれわれは自分自身を人間世界のなかに挿入する。そしてこの挿入は、第二の誕生に似ており、そこでわれわれは自分のオリジナルな肉体的現れ (*appearance*) の赤裸々な事実を確証し、それを

自分に引き受ける。[HC 176–177]

ここにみられるように、また、森一郎が簡潔に説明するように、アーレントの出生性概念は「生まれ出^(ママ)ずる者たちの始まりをはらんだ存在性格」である [アーレント 2015: 508]。詳しくいえばその考え方とは、「われわれ人間は、死すべき者どもであるばかりでなく、生まれ出づる者どもであり、各人が一個の「新しい始まり」である。それゆえ、人間誰しも「新しく始める」力能を有している」というものである [森 2008: 209; 強調原文]。

注目すべきは、力点が「新しく始める」という力能・能力におかれていることである。すなわち、アーレントの「出生性」概念は、アーレント自身が、「第二の誕生に似ており」と書いているように、〈第一の誕生〉たる母親からの誕生（すなわち分娩）の事実とは根本的に異なるものを指し示す概念なのである。

このことは、二つの方向から指摘されてきた。

一つには、アーレント研究における出生性概念の正しい読解をめぐる議論からの指摘である。たとえば、志水速雄訳の『人間の条件』において *natality* は「出生」と訳されている [アーレント 1994]。また、「新生」と訳されている例もある [井上 2019]。しかし、青木崇が指摘するように、「*natality* は語の形として〈natalであること〉という性格を指すはず」であり、さらに、『人間の条件』のドイツ語版『活動的生』には「誕生と出生性」(*Geburt und Gebürtlichkeit*) という表現がみられる [青木 2021: 26]。したがって、*birth* や *Geburt* と区別されない「出生」はもちろんのこと、なおも（性格・性質ではなく）出来事としての捉え方から脱していない「新生」も、*natality* の訳語としてはふさわしくない。こうして提起されているのが森一郎による「出生性」や「誕生性」という訳語である⁽⁶⁾。

さて、たしかに出生性は〈生まれる〉にもとづいて人間に与えられる特性ではあるけれど、言葉と行為による世界への自分自身の挿入という〈第二の誕生〉にもとづいたものであるかぎり、第1節で導入した被産性という概念と同じものではない。アーレントの出生性 (*natality*) 概念は、被産性 (*bornness*) のある一つの側面、〈第二の誕生〉に注目した場合の被産性概念であるといえよう。それは、狭義の被産性ではなく、広義の被産性である。

第3節 被産性の第二相〈第一の誕生〉：フェミニストのアーレント批判

アーレントの出生性概念に生物学的出生・誕生の含意がないことを指摘す

る二つ目の方向として、フェミニストによるアーレント批判がある。その思潮をレビューしたファニー・セーデルベックは、「アーレントが（政治的）出生性についての至上の思想家であるとすれば、そうであるがゆえに、彼女は真に（身体的）出生の思想家ではない」と述べる [Söderbäck 2019: 60]⁽⁷⁾。

セーデルベックが「（政治的）出生性」と呼ぶのは、さきほど紹介したアーレントの出生性概念である。そして、それに対置されているのが「（身体的）出生」である。「（身体的）出生」は第1節で述べた〈生まれる〉の特性を備えた生物学的被産の事態である。これを本稿では、アーレントにおいて語られていた〈第二の誕生〉に対して、〈第一の誕生〉と呼ぶ。

では、〈第一の誕生〉という相に注目した場合の狭義の被産性とはどのようなものであろうか。そのような被産性を考慮に入れることの必要性をはじめに指摘した人物として位置づけられるのは、アーレントおよびイリガライに多大な影響を受けたイタリアの政治思想家、アドリアーナ・カヴァレーロ (Adriana Cavarero, 1947-) である。カヴァレーロはイリガライの『検鏡』(1974) を模すかのようなプラトン解釈書『プラトンにもかかわらず』(Nonostante Platone, 1990) において、端的に次のような指摘をしている。

アーレントは出生概念を母親の子宮から出てくることとして強調してはいない。無から出てくることという、出生のギリシア的な意味を受け入れているのである。[Cavarero 1995: 6]⁽⁸⁾

これがカヴァレーロによるアーレント批判の一点目、母親からの出生という事実の忘却である。カヴァレーロの見立てによれば、アーレントの哲学は母親不在に陥っており、そのために、「深い非対称性と原初的な依存性によって特徴づけられる関係性という、何らか〔伝統的なものとは〕異なったものを主張する機会を提供したであろう出生性の現象学を犠牲にすることになる」のである [Cavarero 2016: 119]。

もう一つ、カヴァレーロがアーレントと異なって強調するのは、個々の人間が出生時に性的差異を与えられることである。

普遍的な「ひと」というものは、決して生まれず、決して生きていない。そうではなく、個別的人々が生まれ、男あるいは女として差異のうち

にジェンダー化されて生きている。[Cavarero 1995: 60]

このようなカヴァレーロの立場の背景にあるのは、イリガライの性的差異の哲学である。カヴァレーロは、1983年から1984年にかけてヴェローナで設立された「ディオティマ」というフェミニストグループの中心メンバーであった。「ディオティマ」はイリガライの「戦略的本質主義」に理論的基盤を求めている [Cavarero & Bertolino 2008]。つまり、「ディオティマ」のメンバーたちが立脚するのは、男女の平等を追求する平等主義的なフェミニズムではなく、いわゆる差異派のフェミニズムである⁽⁹⁾。このような背景があるために、カヴァレーロはアーレントの出生性概念を性的差異の立場から批判したのである。

しかし、本稿ではさしあたり、カヴァレーロによる第二の批判点、すなわち生まれてくる人間の性的差異については考察しないでおく。リサ・ギュンターが述べるように、カヴァレーロの立場は「インターセックスの子どもについて完全な説明をすること、あるいは、生きられた経験のうちでのセックスとジェンダーとの複雑な絡み合いに論究することを困難にしている」 [Guenther 2008: 115 n14]。この論点はきわめて重要ではあるが、本稿で扱うのは困難であるため、さしあたり第一の批判点にのみ注目する⁽¹⁰⁾。

さて、カヴァレーロによる批判（第一の批判点）を踏まえてアーレントの提示した出生性概念を再考する比較的包括的な研究の一つに、アリソン・ストーン『ビーイング・ボーン』（2019）がある。ストーンは〈生まれる〉(to be born) を次のように定義している。

人間にとって、生まれるとは、(i) 時間上のある特定の点において存在しはじめることであり、それは (ii) ある特定の身体をもって／として、ある特定の場所において、一連の関係性において、社会・文化・歴史的立場において世界へと到来することによってであり、そのときそれは、(iii) 子宮のなかに身籠られ、孕まれ、そうして子宮から出てくるという仕方によってなされる。 [Stone 2019: 1]

ここに三つの観点が挙げられているが、ストーンはここから人間の出生にまつわる特性をいくつか導き出している。①依存性、②関係性、③ある状況のなかに置かれること、④社会的権力へと埋め込まれること、⑤根源的な偶然性、⑥傷つきやすさ^{ヴァルネラビリテイ}、⑦出生不安である [Stone 2019: 2-6]。人間の出生のこのような特性は、上の引用の (i) (ii) (iii) のうち、とりわけ (iii) が産科的ジレンマ (obstetrical dilemma; 以下、OD) という人間特有の事情に

よって特徴づけられていることにもとづいている [Stone 2019: 8]。

人間は他の高等な哺乳類に比べて「未熟な」状態で生まれてくる。このような見方は、スイスの動物学者アドルフ・ポルトマンの「生理的早産」説として知られ、「子宮外胎児期」という言葉とともによく知られている [ポルトマン 1961]。このようなポルトマンの見解を支えるものとして考えられるのが OD 仮説である。

OD 仮説は 1960 年に S. L. ウォッシュバーンが提唱した仮説である [Washburn 1960]。人間の出産には、骨盤が十分に発達していない状態で妊娠した場合に胎児の頭と骨盤の不適合などの問題が生じ、閉塞性分娩と呼ばれる胎児にとっても母親にとっても危険な出産を経験することになるという困難が伴う。産道が広くなり胎児が小さくなればこのリスクは減ずるけれども、人類は逆に、直立二足歩行によって骨盤が狭くなり、したがって産道も狭くなり、脳の肥大化によって胎児は大きくなっていった。人類進化のなかの選択圧として、このようなトレードオフ関係が人類に困難をもたらしてきた。これが OD 仮説と呼ばれるものである [Haeusler et al. 2021] ⁽¹¹⁾。

OD 仮説に注目して人間の生まれ方の特徴を見定め、そこから依存性や関係性等を抜き出すストーンの議論は、アーレントが提示した出生性とはまったく異なり、〈第一の誕生〉の意味での〈生まれる〉にもとづいた被産性概念を提示している。そのことは、「出生性と生まれることを同義語として用いる」という宣言からもわかる [Stone 2019: 1]。より直接的に、次のようにも述べられている。

アーレントにとって、「出生性」は変化的に次のことを含んでいる。(i) 生まれること、(ii) 出生により新たに到来すること、(iii) 生まれ出づるものとしてのわれわれ人間の条件、そして (ii) かつ／または (iii) のゆえに、(iv) 行為を主導することができること。私は (i) (ii) (iii) についてはアーレントに賛同するが、[……] (iv) については賛同しない。それゆえ、私は出生性を直接的に (i) から (iii) の意味と等置し、アーレントのような政治行為の含意はもたない。[Stone 2019: 20 n1]

このことから、〈生まれる〉と等置されたストーンの「出生性」(natality) 概念——依存性や関係性等、生物学的な出生、すなわち〈第一の誕生〉、あるいは子宮からの誕生に注目した際に引き出される人間の諸々の特性の束——を、本稿では〈第一の誕生〉の意味における〈生まれる〉にもとづいた狭義

の被産性概念の代表とみなす。

第4節 被産性の第一相〈誕生前の現れ〉

第3節でみた狭義の被産性に対して、第2節でみた派生的な意味における〈生まれる〉にもとづくアーレントの出生性のような広義の被産性概念も認められるとするならば、さらにもう一つ、派生的な被産性概念が浮上する。それは〈第一の誕生〉より前の〈生まれる〉である〈誕生前の現れ〉にもとづく被産性概念である。

ストーンは〈誕生前の現れ〉について、簡単ではあるが注意深く次のように指摘している。すなわち、「われわれはすでに、子宮内の生活のなかでも他者と関係をもち、世界内に存在しはじめている」[Stone 2019: 37]。このことは、たとえば、クリスティーナ・シュースが「アーレントは、ある人の存在(Sein)をその人の現れ(Erscheinen)と結びつける。そうすることによって、彼女は現象主義へと逆行している」[Schües 2016: 403]と述べていることに鑑みれば、アーレント批判でもあろう。〈第一の誕生〉への注目もアーレント批判であったが、〈誕生前の現れ〉への注目も、アーレントが「無」と考える誕生前をを「有」(すでに現れていること)と考えることによる批判となっているだろう。われわれはどこでもないところからやってきたのではなく、誰かの子宮からやってきた。そのことは〈第一の誕生〉への注目を促しもするが、〈誕生前の現れ〉への注目を促すのである。

とはいえ、先行研究ではこのような文脈における〈誕生前の現れ〉のもつ特性およびその意味が十分に論じられてはいない⁽¹²⁾。ここで簡単に考察を試みよう。沖田×華の漫画『透明なゆりかご』から例を引いて考える。

胎児の臓器の一部がないことが判明し中絶した過去をもつ女性が再び妊娠7ヶ月で××クリニックに来ている。クリニックの産婦人科医は女性のお腹のなかの赤ちゃんの心臓の音が気になった。〇〇総合病院で検査を受けさせると、赤ちゃんは重度の心臓病であることが明らかになる。延命の処置をおこなわなければ、1週間ほどの命だという。再度××クリニックにやってきた夫妻は中絶を決断した。夫は「先生がまた作れるって言ってたから あきらめずに頑張ろうよ」と妻に声をかける。妻は「あなたは分かってない」と言う。妻はお腹を触ると赤ちゃんからポコンッという反応が返ってくることから、赤ちゃんを「ポコ」と名付けていた。夫はそのポコンッという反応を受け取ることができていなかった。妻は言う。「分かってほしいのに……ずっと感じてるの 今も会話してるの ポコと」。最終的に夫妻は中絶せず産むことを決心する [沖田 2016: 6-17]⁽¹³⁾。

ここで表現されているのは、ストーンの指摘のとおり、胎児が生まれる前から外界の人間と交流しているということである。父親はその反応を受け取っていなかったが、母親は交流していた。名前をつけるほどに胎児の存在がたしかに感じ取られるということは、子宮から外界へと出ていないにもかかわらず、胎児はすでに何らかの意味で〈生まれている〉ということである。

〈第一の誕生〉は子宮から外の世界へと出ること、〈第二の誕生〉は人間同士のやりとりがおこなわれる公的な世界へと言葉と行為によって現れ出ることであった（第2節、第3節参照）。しかし、子ども（あるいは人間）が人前に現れ出るのはその二つの場合だけではないということになる。子宮から出る前でさえ、人前に現れ出ている。〈第一の誕生〉にもとづく被産性概念（ストーンらにおける「出生性」）、および〈第二の誕生〉にもとづく被産性概念（アーレントにおける「出生性」）をこれまでみてきたが、ここで、〈誕生前の現れ〉にもとづく被産性が考えられる可能性が浮上してくるのである。

〈誕生前の現れ〉〈第一の誕生〉〈第二の誕生〉が被産性概念のもつ三つの相である。それぞれ、出生前被産性、出生時被産性、出生後被産性と呼ぶことにしよう。なお、「出生時」といっても、単発的な出生の出来事における何らかの性質を指すのではなく、それにもとづいて与えられ、以後継続する性質のことを指していることに注意されたい。同様に、出生前被産性とは出生前から人間に与えられている性質のことであり、出生後被産性は出生後に人間に与えられる性質のことを指している。すなわち、出生前被産性から順に重層的に人間の条件をなすということになる。

〈誕生前の現れ〉にもとづく出生前被産性はどのようなものであろうか。〈第一の誕生〉（狭義の〈生まれる〉）や〈第二の誕生〉と比較したときに、〈誕生前の現れ〉には次のような特徴が考えられる。まず、胎児は外界に出ていないので、その〈現れ〉（〈生まれる〉）はどこまでも母体に媒介される [Stone 2019: 38]。そして、直接的交流に限れば、胎盤をとおした母親との交流以外にはない。このように、①母体との密接な関係性が挙げられる。そして、それゆえに、〈第一の誕生〉の場合と同じく、しかし一層深刻に母親に依存しているという②依存性がある。そのことによって導かれるのは、〈第一の誕生〉の場合とは対照的に、傷つきやすさではなく、③被護性^{ヴァルネラビリティ}であろう。胎児に傷つきやすさを認めがたいことは、胎児が死にうる存在ではないということも含意している。誕生後に傷つきやすさが顕著になるのは、人間は生まれたとたんに死にうる存在であるからである。しかし胎児は生まれていない。死すべきものであるという可死性ではなく、生まれないかもしれないものであるという、いわば④未生可能性をもっている⁽¹⁴⁾。

おわりに

本稿で明らかにしたことを整理しよう。

人間にとって〈生まれる〉とはどのような意味をもつことなのか。それを探究するために、本稿では〈生まれる〉の意味を表す概念として被産性という概念を提起し、被産性の三つの相、すなわち〈誕生前の現れ〉〈第一の誕生〉〈第二の誕生〉をみてきた。そして、それぞれについて、出生前被産性、出生時被産性、出生後被産性という被産性をみてきた。

出生前被産性とは、周囲の人間の想像のなかに〈現れる〉という広義の〈生まれる〉にもとづく被産性であり、そこには、胎盤をとおして母体と直接的な交流をし（関係性）、また依存し（依存性）、守られ（被護性）、生まれないかもしれない（未生可能性）といった諸々の特性が含まれる。

出生時被産性とは、子宮から出てくるという狭義の〈生まれる〉にもとづく被産性であり、そこには、自らの意志なく・故なく生まれ（偶然性）、周囲の人間に依存的な関係をもち（依存性・関係性）、そうした依存的な関係なくしては即座に死んでしまうということ（ヴァルネラビリティ傷つきやすさ）が含まれていた。それは、とりわけ未熟な状態で生まれるという人間の生物学的な特性によるものであった。また、ある社会・文化・歴史的な状況のなかへと置かれることも重要な特性であった。

出生後被産性とは、言葉と行為によって人間世界へと〈現れる〉という広義の〈生まれる〉にもとづく被産性であり、そこには新しいことを始めるという新規性が主として含まれていた。

被産性のこれら三相は、それぞれが互いにバラバラに効果をもつのではなく、重層的に人間の生に影響をおよぼすであろう。出生前から出生、出生後へと人間が成長・発達するにつれ、出生前被産性、出生時被産性、出生後被産性が順に、重なり合うようにして効果をもつのである。しかし、出生後にも依存性や関係性は何らかの形でみられるはずであるがそれはどのようにしてか、出生後被産性はどのような発達段階から認められるといえるのか、出生後にまで出生前被産性は影響をおよぼすのかなど、本稿で明らかになっていないことは無数にある。被産性概念はいまだ粗雑なものであり、本稿はさらなる考察への準備をしたにすぎない。今後より一層の研究が必要である。

注

- (1) 「産み」の人称については居永正宏 [2016] が論じている。〈生まれる〉の人称についての丁寧な考察は今後の課題とする。

- (2) たとえば、鷺田清一 [2008] の考察などを参照のこと。
- (3) ここでは考察の対象を一人称の〈生まれる〉に限っているため、とりわけ受身性が重要な特性となる。しかし、二人称・三人称視点で〈生まれる〉を考える場合は、必ずしも受身性が問題となるわけではない。むしろ、誰かが〈生まれる〉あるいは〈生まれさせられる〉という受動的な側面とその誰かを別の誰かが〈生む〉という能動的な側面とが同時に発生していることが際立ってみられるであろう。
- (4) 産む・産まれるという対比では能産・所産という語があるが、所産には〈産まれた（つくられた）もの〉という意味がすでに定着しているので、本稿では〈産まれること〉を表すために被産という新たな語をつくる。〈産まれること〉（本文で用いている表現では〈生まれる〉）にまつわる性質が被産性であり、たとえば、〈産まれたもの〉は被産者ということもできる。なお、被産は^{ひさん}悲惨と同じ読みではあるが、〈産まれたことは被害であって悲惨である〉といった含意をもたせる意図はない。中立的に受身性を表すための語であって、被害性を際立たせる語ではない。
- (5) 以下、『人間の条件』[Arendt [1958] 2018] からの引用は [HC 頁] の形で示す。邦訳 [アレント 1994] を参照したが、改訳を施している。
- (6) 森一郎は『活動的生』の邦訳において、Natalität を「出生性」、Gebürtlichkeit を「誕生性」と訳し分けている [アーレント 2015]。
- (7) セーデルベックは、出生の哲学に関する研究をレビューしながら、「そうしたフェミニストの著作の多くがイギリスの学界から輩出されているのは興味深い」[Söderbäck 2019: 60] と述べているが、それはセーデルベックが英語圏の文献しか参照していないからである。実際には、本稿で参照しているクリスティーナ・シュースの『生まれてきたことの哲学』（初版 2008 年、増補版 2016 年）[Schües 2016] のほか、ペーター・トラヴニーがレビューしているようなすぐれたドイツ語文献も存在する [Trawny 2009]。また、フランス語、イタリア語等でも関連文献は存在する。したがって、セーデルベックのレビューは納得のいくものとはいいがたく、今後より包括的なレビューが望まれる。
- (8) イタリア語原書が手に入らなかったため英訳を参照せざるをえなかったことを断っておく。
- (9) イタリア・フェミニズムについて、特に「ディオティマ」について、日本語で読める文献として、潮屋郁也によるものがある [潮屋 2020]。
- (10) カヴァレーロによるアーレント批判については、リサ・ギンター [Guenther 2006: Chap. 2] やアリソン・ストーン [Stone 2019: 35–45]

の議論を参照のこと。また、カヴァレーロのアーレント批判を参照しながらその視点を議論全体の基底にすえているものに、クリスティーナ・シュースの『生まれてきたことの哲学』がある [Schües 2016]。しかし、ペーター・トラヴニーは次のようにシュースを批判している。シュースは「プラトンの「洞窟の比喩」を出産の行為 (Gebärrakt) として理解するリュス・イリガライとアドリアーナ・カヴァレーロによる解釈に無批判に従っている。それが実際には解釈にかかわることであって決して事実にかかわることではないということが、ただの一度も指摘されていない」 [Trawny 2009: 21]。このような難点を含んではいるものの、あくまで一つの解釈として、イリガライーカヴァレーロの立場に立ちながら、アーレントの出生性の哲学を含む古代から現代までの西洋哲学史における出生の扱いを振り返りつつ〈生まれてきたこと〉 (Geborensen) についての包括的な議論をおこなおうとするシュースの研究は貴重である。トラヴニーの指摘にしたがって、イリガライーカヴァレーロによるのとは異なる仕方で、すなわちフェミニズムとは異なる仕方で〈生まれる〉を考察することは、今後の課題である。

- (11) 現在では OD 仮説によって人間の新生児の無力さを説明することには異議が唱えられている。たとえば H. M. ダンスワースは、人間が未熟なままに生まれるのは母体の骨盤の大きさによるのではなく母体と胎児の代謝のバランスの変化によるのだとする EGG 仮説 (energetics of gestation and growth) を提唱している [Dunsworth et al. 2012; Dunsworth & Eccleston 2015; Dunsworth 2018]。それでもなお OD 仮説は一つの仮説でありつづけているため、ストーンはこれを人間の出生にまつわる依存性や関係性等の根拠として挙げている [Hauskeller & Stone 2022: 197 n8]。
- (12) ジェーン・ライマーの『身重の現象学』 [Lymer 2016] のように、胎児の法的身分をめぐる議論から出発して妊娠する身体について考察する先行研究はある。
- (13) 1991年以降、母体保護法 (旧優生保護法) では妊娠 22 週を超えた時点での人工妊娠中絶は認められていない。したがって、この漫画『透明なゆりかご』に描かれた 1997 年当時の日本でも、妊娠 7 ヶ月を超えたこの夫妻が中絶を選択することは法的には許されない。なお、2018 年に放送されたテレビドラマ版 (脚本: 安達奈緒子、主演: 清原果耶) では、「今回は 諦めるっていう選択も できますよね」と問う夫・拓郎 (金井勇太) に産婦人科医の由比 (瀬戸康史) が「まだ 20 週ですから 灯里さ^{あかり}

んの心身の負担を考えれば できます」と中絶の選択肢を提示するシーンに書き換えられている [安達 2019: 48:36-48:58]。テレビドラマ版であれば法的には問題がない。

- (14) 〈生まれない〉への注目は、西平直 [2015] から示唆を得た。〈生まれない〉への注目を含め、胎児についてここでおこなっている議論は生命倫理・生命観の問題と深く関係する。丁寧な考察は今後の課題とする。

文献表

- 青木崇 (2021) 「赤子はどこへ生まれるか——可死性と出生性、ハイデガーとアーレント」『Arendt Platz』6: 23-34.
- 安達奈緒子 [脚本] (2019) 『透明なゆりかご④』 [DVD] (原作: 沖田×華『透明なゆりかご』) NHK エンタープライズ
- 居永正宏 (2014) 「「産み」の哲学に向けて (1) ——先行研究レビューと基本的な論点の素描」『現代生命哲学研究』3: 88-108.
- 居永正宏 (2015) 「フェミニスト現象学における「産み」をめぐる——男性的「産み」論の可能性」『女性学研究』22: 99-126.
- 居永正宏 (2016) 「産みの人称性と性的差異: 「誕生肯定」再論としての「産む男」試論——「産み」の哲学に向けて (3)」『現代生命哲学研究』5: 1-12.
- 井上達郎 (2019) 「子どもの「新生」を通じた「世界」の再生と持続——H・アーレント「保守的」教育論の思想的含意」『立命館産業社会論集』54 (4): 67-86.
- 沖田×華 (2016) 『透明なゆりかご③』講談社
- 潮屋郁也 (2020) 「イタリア・フェミニズムにおける「母」をめぐる思想と実践——チェーザレ・カザリーノ、アンドレア・リーギ編『もう一人の「母」: ディオティマとイタリア・フェミニズムにおける象徴秩序』を読んで」東京外国語大学海外事情研究所『Quadrante』22: 215-226.
- 西平直 (2015) 『誕生のインファンティア——生まれてきた不思議、死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議』みすず書房
- ポルトマン, A./高木正孝 [訳] (1961) 『人間はどこまで動物か——新しい人間像のために』岩波書店
- 森一郎 (2008) 『死と誕生——ハイデガー・九鬼周造・アーレント』東京大学出版会
- 吉野弘 (1968) 『現代詩文庫 12 吉野弘詩集』思潮社

- 鷺田清一（2008）『死なないでいる理由』 KADOKAWA
- Arendt, H. ([1958] 2018). *The human condition*. 2nd. ed. Chicago & London: The University of Chicago Press. [=アレント, H./志水速雄 [訳] (1994) 『人間の条件』 筑摩書房]
- Arendt, H. ([1967] 2020). *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, hrsg. von T. Meyer. Erweiterte Neuauflage. München: Piper. [=アーレント, H. / 森一郎 [訳] (2015) 『活動的生』 みすず書房]
- Cavarero, A. (1995). *In spite of Plato: A feminist rewriting of ancient philosophy*, trans. by S. Anderlini-D’Onofrio & Áine O’Healy. Cambridge: Polity. (Original work published 1990)
- Cavarero, A. (2016). *Inclinations: A critique of rectitude*, trans. by A. Minervini & A. Sitze. Stanford, CA: Stanford University Press. (Original work published 2014)
- Cavarero, A. & Bertolino, E. (2008). Beyond ontology and sexual difference: An interview with the Italian feminist philosopher Adriana Cavarero. *differences: A Journal of Feminist Cultural Studies*, 19 (1): 128–167.
- Dunsworth, H. M. (2018). There is no “obstetrical dilemma”: Towards a braver medicine with fewer childbirth interventions. *Perspectives in Biology and Medicine*, 61 (2): 249–263.
- Dunsworth, H. M. & Eccleston, L. (2015). The evolution of difficult childbirth and helpless hominin infants. *Animal Review of Anthropology*, 44: 55–69.
- Dunsworth, H. M., Warrener, A. G., Deacon, T., Ellison, P. T., & Pontzer, H. (2012). Metabolic hypothesis for human altriciality. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 109 (38): 15212–15216.
- Guenther, L. (2006). *The gift of the other: Levinas and the politics of reproduction*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Guenther, L. (2008). Being-from-others: Reading Heidegger after Cavarero. *Hypatia*, 23 (1): 99–118.
- Haeusler, M., Grundtra, N. D. S., Martin, R. D., Krenn, V. A., Fornai, C., & Webb, N. M. (2021). The obstetrical dilemma hypothesis: There’s life in the old dog yet. *Biological Reviews*, 96: 2031–2057.
- Hauskeller, M. & Stone, A. (2022). Birth. In M. Hauskeller (ed.), *The things that really matter: Philosophical conversations on the*

- cornerstones of life* (pp. 180–200). London: UCL Press. [=ハウスケラー, M.・ストーン, A./仲井慧悟 [訳] (2022)「出生について」『人文×社会』7: 155–183.]
- Lymer, J. (2016). *The phenomenology of gravidity: Reframing pregnancy and the maternal through Merleau-Ponty, Levinas and Derrida*. London/New York: Rowman & Littlefield.
- Schües, Ch. (2016). *Philosophie des Geborensseins*. Erweiterte Neuauflage. Freiburg/München: Karl Alber.
- Söderbäck, F. (2019). Birth. In R. T. Goodman (ed.), *The Bloomsbury handbook of 21-st century feminist theory* (pp. 59–79). London/New York: Bloomsbury.
- Stone, A. (2019). *Being born: Birth and philosophy*. Oxford: Oxford University Press.
- Trawny, P. (2009). Was heißt Geburt? *Philosophische Rundschau*, 56: 17–37.
- Washburn, S. L. (1960). Tools and human evolution. *Scientific American*, 203 (3): 63–75.